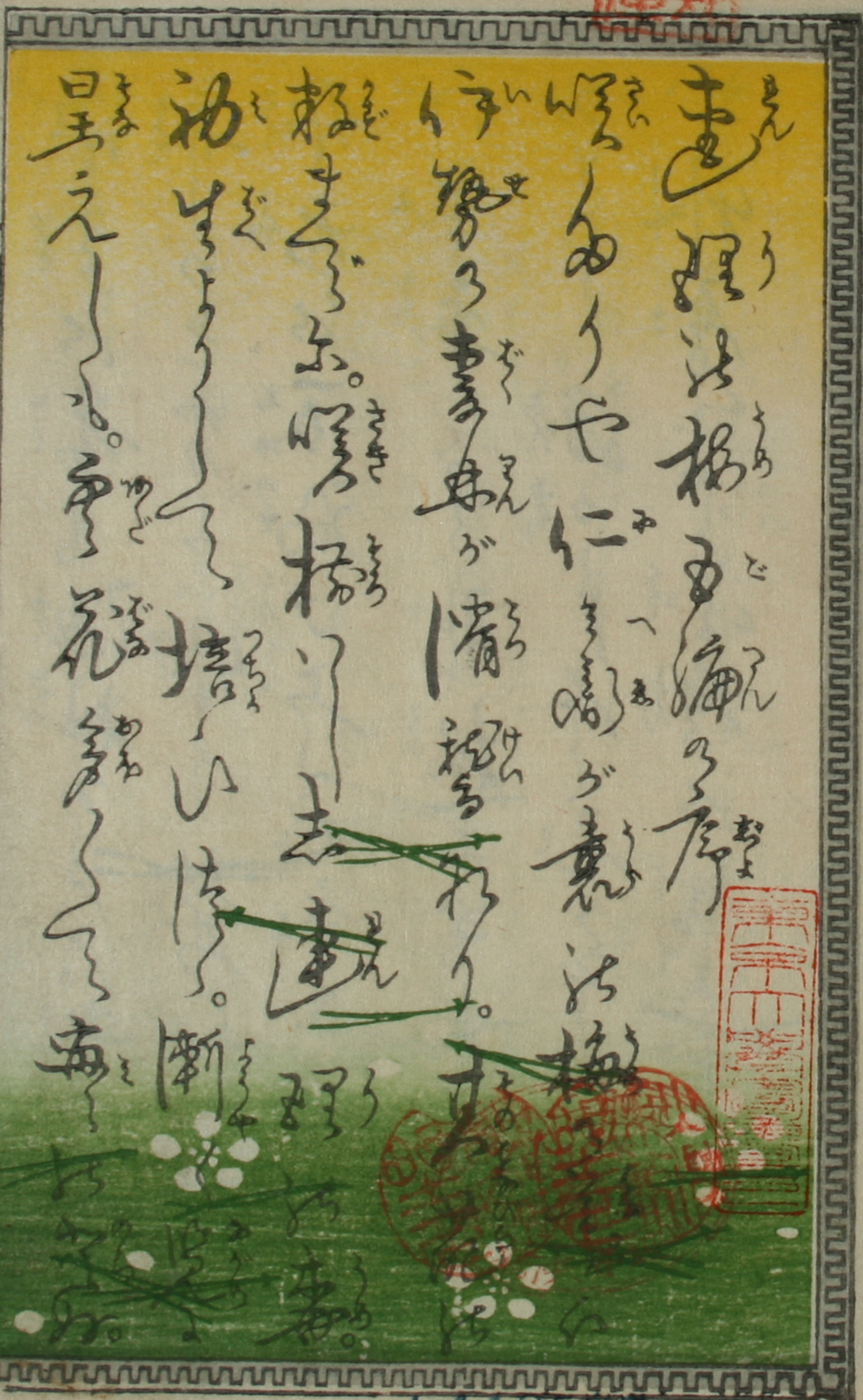
和門
文之部
人31號
五冊
5

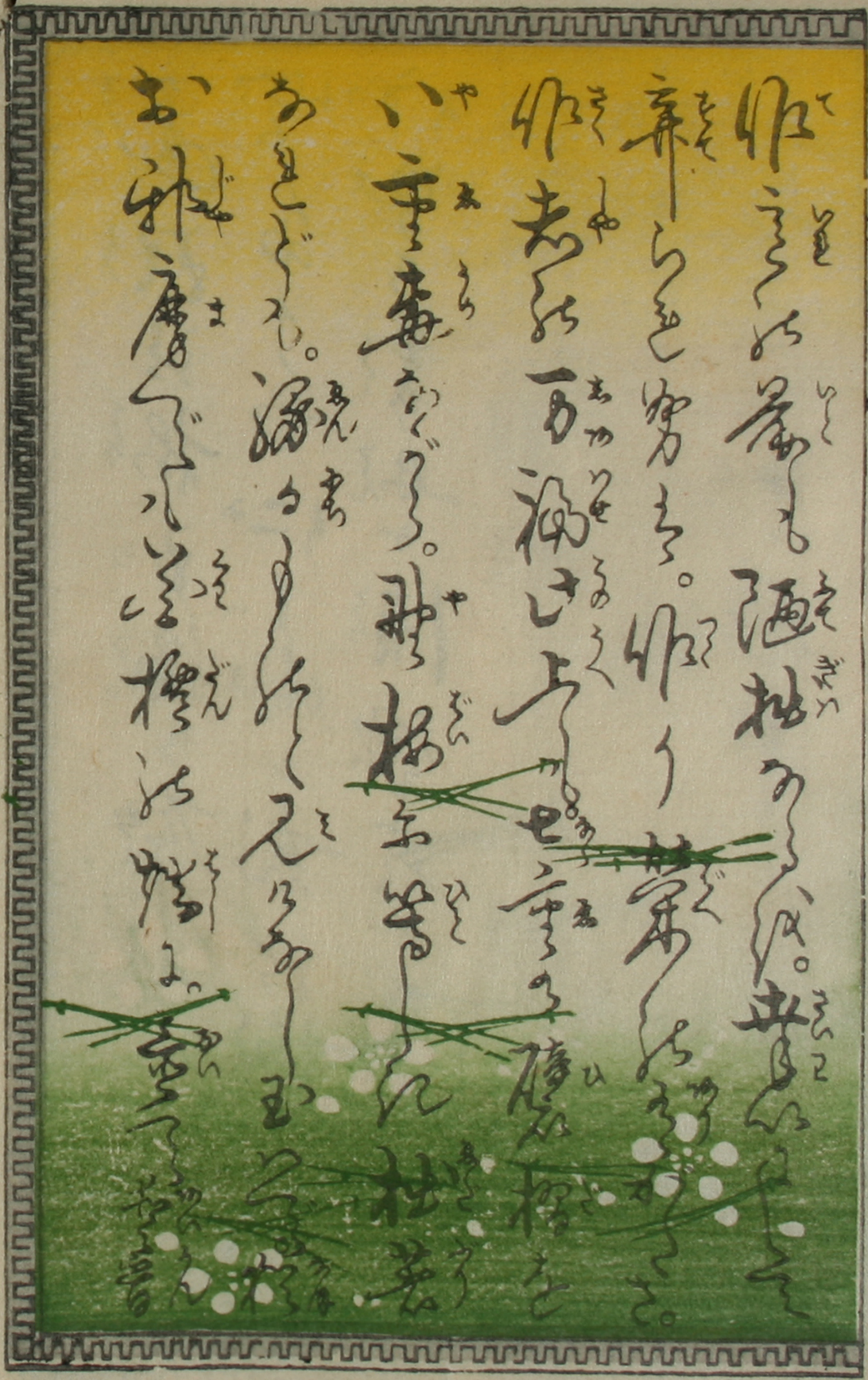
國語
4L
124
5

日本文庫



112577

国語



梅花百詠

梅ぶくみそめて　梅
戊午孟春東風解凍
於二郢曲三昧遊戯導
梅堂里之

莫傳抄



いで意馬心猿のまろうきんの

三さん出まつ由之助

夫木集

さいあふ
再逢
ふ梅
ふ

ふびん
ふ行
ふ
ふ
ふ




最明寺殿詠歌
三ん出物



本編
書房
同刻

第廿五齣

梅暮里谷峩作

人(ひと)は意(い)の起(おこ)るもの。是(これ)を号(なづ)けて性(さが)と曰(いふ)。善(ぜん)悪(あく)ともに真己(まのおの)が欲(よく)する事(こと)より自(おのづ)から発(おこ)る。是(これ)を善(ぜん)惡(あく)の分(わか)れ目(め)とす。故(ゆゑ)に善(ぜん)惡(あく)ともに性(さが)なり。然(しか)れども善(ぜん)惡(あく)の名(な)あるは何(なに)ぞや。曰(いは)く。善(ぜん)は性(さが)の正直(しやうぢき)なるもの。惡(あく)は性(さが)の邪曲(よこしま)なるもの。或(あるひ)は貪(どん)欲(よく)或(あるひ)は嗔恚(しんい)或(あるひ)は愚癡(ぐち)或(あるひ)は驕慢(けうまん)或(あるひ)は嫉妬(しつと)或(あるひ)は慳貪(けんどん)等(とう)の惡(あく)は皆(みな)真(まこと)の中(うち)より発(おこ)る。或(あるひ)は信(しん)義(ぎ)或(あるひ)は仁(じん)慈(じ)或(あるひ)は恭敬(きやうけい)或(あるひ)は謙遜(けんそん)等(とう)の善(ぜん)は皆(みな)真(まこと)の中(うち)より発(おこ)る。是(これ)善(ぜん)惡(あく)の区別(くべつ)あり。是(これ)惡(あく)を去(さ)りて善(ぜん)に就(つ)くが。性(さが)を養(やしな)ふの工夫(くふう)なり。是(これ)を以(もつ)て善(ぜん)惡(あく)ともに性(さが)なりと云(いふ)。

氣の
不
驚
き
れ
ど
も
婦
女
の
約
ひ
を
。
怪
ま
ず
し
て
由
々
、
敵
が
か
く
る
ま
で
も
な
く
先
う

倫敦(ロンドン)がお松(まつ)を連(つれ)て来(き)た。
関係(かんけい)の深(ふか)い美(うつく)しい女(をんな)の。
ろひを易(やす)き男(をとこ)等(ら)。
を絶(たち)し玉(たま)ふ。
あまる。涙(なみだ)を啜(すゝ)よ。
男(をとこ)が先(さき)を越(こ)さぬ。
見(み)る。
分(わけ)で。
男(をとこ)の方(かた)を曳(ひ)き廻(まは)され。
下(さげ)して。
男(をとこ)の愛(あい)の愛(あい)よう。

ともその男三世もと。金を儲け
ぬ春き
とあるを。ねたみさげすみて
しさそ。有繋みるまねぬ女の情。殺去
ぬ角へ牝鹿の
奥恚のたゝ
を。おつこし堪へ
く悲しみよ
ぬおもみ
お林ふ
も又ふ
ぬ

わ念
ふ
ん由縁
る中ぞ
ふ
ぶ
ぶ

お林ふ
くおぶ
ぶ
ぶ

が娘。姫と崇めそうもない。姫と。お雪。お雪ど。お雪ど姫とし姫。お雪ど。お雪ど。お雪ど

でもしてお在のトやアびさなまセう
そんぴきへ
色んのをそ
うもまもまセんおれぴ
の動静でもそんぴ
そもでそうまもうまもう
私しやアびさなまセう
多勢妻
お兄ち



いまさらなにごとぞうぶごとのやうにおもはんもはづかしくてなにごとぞうぶごとのやうにおもはんもはづかしくて

ものもいはれずおもはずなみだがこぼれまするものもいはれずおもはずなみだがこぼれまする

ばかりなりとてもとかくにおもひこむ男のかたもおもはれまいばかりなりとてもとかくにおもひこむ男のかたもおもはれまい

ものをとおもひきるこころもよわくなりてなにごとぞうぶごとのやうにものをとおもひきるこころもよわくなりてなにごとぞうぶごとのやうに

おもはんもはづかしくてものもいはれずおもはずなみだがこぼれまするおもはんもはづかしくて

おまちかねの
ごくらくよ
きまくらもと
ちらふだの
そろふとき
しぜんとめ
イヨウおか
ぐるまさん
ぐるまのふ
しくおや

りうきうウ（だ）ざわまち（ばし）（ばし）ヲヤニ。（ゆ）ヨヤニ。（ゆ）
さ（ば）ゐ（ば）ん（ば）の（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
玉（ば）嬢（ば）の（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
をかしの（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
さんの（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）

（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）

（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）

（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）

（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）
（ば）ゐ（ば）ん（ば）を（ば）

くだくだしく記すに遑あらず。

扨、彼の娘を切殺したる下女は、

其の時、お幾が声を聞て驚き、

何事ならんと、お幾が部屋へ入来りしに、

娘は既に殺されて、

其の外、四海の下の者と見えて、

よろしく食せんとする有様なり。

下女は大に驚き、

すぐに立帰りて、

其の事を主人に告げるやう、

お幾様が御乱心にて、

娘様を殺し、

其の外、四海の下の者のやうなる者を、

よろしく食せんとなさるゝ有様なり。

早く来りて、

お幾様を取鎮めなさるべしと、

告るやうに言ければ、

主人は大に驚き、

急ぎ立出でゝ、

お幾が部屋へ入来りて見るに、

娘は既に殺されて、

其の外、四海の下の者と見えて、

よろしく食せんとする有様なり。

主人

何んとやうてもお前さんのお目ざわりませんやうにいたしますせんぐらうさんのお安ひ事ですからどうぞ御ゆるしなすつて下さいまし

ら御尤さまでございますけれどもまだ御存じのお客さまのお事でございますのでおやくそくをいたしましたからにはどうぞ御ゆるしなすつて下さいまし

てお客さまのお事でございますのでおやくそくをいたしましたからにはどうぞ御ゆるしなすつて下さいまし

まうしますとあの嬢さまもさぞおがつかりあそばすでございませうからどうぞ御ゆるしなすつて下さいまし

ゆるしなすつて下さいまし

うおの目の玉をくりぬいて
ざるの中へ清水をくんでは入れ
くんでは入れしますうちに死
んでしまいました。あの娘
をおきさきにしてやりたいと
おもいましたが。おきさきは
由もない事だから。ただ娘
のきもをとりだしてもつて
くるようにと。いいつけました。
娘はおきさきのいいつけだ
から。しかたなしに。ある山
の中へ入つて。猪をうちころ
して。きもをとりだしてもつ
て帰りました。おきさきは
それをにて。さかなにして
たべました。娘はおきさきの
ために。命をたすけられた
ので。大そうよろこんで。
山の中へ入つて。猟師の
男と夫婦になつて。



あれば、まんまとお傳さまをみんなで
のがれ、お家へ悲しみを發しぬ。
病をおこし、まもなく死す。
なきてくやみをのべ、
もかへり、

やさしくも和のも絵ぐぢ
うちの物おもしろ
ひとのおんざうし
ろくをもみで
をこもの先が
扁扨
虚病

うるわしき由緒ぐさでありも
でさまもまんまんまんまんまん
男ふ
乗
ぎぎ
ぶ
ねねね

の清姫(きよひめ)娘(むすめ)のやうまで泣(な)き
つゝ死(し)ぬ教(をし)へをろ〳〵
もう分(わか)り懼(こわ)しまゝでござ
が何(なん)ぼ懼(こわ)しても
もう分(わか)りましたと
もう分(わか)のろ〳〵ふ
お菜(さい)のもろ〳〵
もう分(わか)
お雪(ゆき)の分(わか)
しぜん
自然と
やさしき
第和(だんわ)
嬢(じょう)
養育(そだて)
やう
移(うつ)
嬢(じょう)
なまり
なまり
なまり

ちゝおやのれへ
ゟ
ゝたをうんちゃまき
ゝおうんちゃ移へ
ゝとおかをいろ
ゝうんちゃ白服で
ゝをゝ。新婚ぎ
ゝりのとちゃんを
ゝ。そ
ゝをゝ
ゝ由へ今の仕
ゝ
ゝもゝ
ゝ
ゝ

みまもりて。牝雲をうかゞふ。
つぐの朝は
まうでぬ。牝雲も
雲を
うかゞふ。雲ぎれ
雲の
彩ふ。牝雲
雲の
牡雲連れ帰る
雲の
由を
く父
父の
弘
父の
父の
父の

つけびの松もともゝかみ
新ざしき父をけ角てぷ
まもなくぬ面色かへて
ゐるくるくる強ぎ、
ぎぐねまもんん由
くのやうふ
きでも上めが高晴で
らぎおぐるまる
ゝ由

春色連理の梅巻之十三了

○もゝしきや古き都の春の夜の
　朧月夜に似るものぞなき

○ながめやる軒端の梅の匂ひさへ
　ふりにし宿の春ぞ恋しき

○ながめつゝ袖に涙の露ふけて
　むかしを偲ぶ春の夜の夢

○ながめやる軒端の梅の匂ひさへ
　ふりにし宿の春ぞ恋しき

○ながめつゝ袖に涙の露ふけて
　むかしを偲ぶ春の夜の夢

○もゝしきや古き都の春の夜の
　朧月夜に似るものぞなき